
 学 会 記 事

平成 26 年度新潟精神医学会

日 時 平成 26 年 10 月 25 日 (土)
午後 1 時 40 分より
会 場 ANA クラウンプラザホテル新潟
2F 芙蓉

I. 一 般 演 題

1 統合失調症患者に対する ECT 実績調査

池崎 寛子・保谷 智史・染矢 俊幸
新潟大学医歯学総合病院 精神科

【目的】統合失調症に対する電気けいれん療法 (ECT) は、日本精神神経学会 ECT 検討委員会より適応基準が提示され、急性期、緊張病症状を伴うもの、気分症状を伴うものが良い適応とされているものの、実際の臨床においては治療抵抗性、薬剤不耐性を理由に用いられることも少なくはない。今回我々は、ECT を導入された統合失調症例の診療録を調査し、病型および ECT 導入理由という観点から、ECT の臨床効果について検討を加えた。

【方法】2005 年 1 月から 2014 年 7 月まで、新潟大学医歯学総合病院精神科にて統合失調症の治療で初めて ECT を導入された患者を対象とした。病型、ECT 導入の理由という観点から、治療反応性について後方視的にカルテ調査を行った。尚、対象患者の情報から個人が特定できないよう十分な配慮を行った。

【結果】症例は 20 例 (男性 5 例、女性 15 例) あり、病型の内訳は鑑別不能型が 50 % を占めていた。導入理由としては治療抵抗性が 85 % と最も多かった。病型別にみると、緊張型では比較的治疗反応性が良く、解体型で治療反応性が劣る傾

向がうかがわれた。また、治療抵抗性を理由として ECT を導入された症例では 47 % で治療反応性を認めた。治療反応性を認めた症例のうち、維持 ECT へ移行した症例は 3 例だった。

【考察】調査の規模が小さいため判断の限界はあるが、緊張型において良好な治療反応性がうかがわれ、治療抵抗性の統合失調症においても一定の治療効果を認めるという結果は、先行研究に矛盾しなかった。当日は、維持 ECT についての文献的考察も加えて発表する予定である。

2 Cornelia de Lange 症候群に関連した自閉スペクトラム症の 2 症例

渡邊 藍子・福井 直樹・吉永 清宏
遠藤 太郎*・北村 秀明・染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院 精神科
新潟こころの発達クリニック*

【はじめに】Cornelia de Lange 症候群 (CdLS) は先天奇形症候群の 1 つで、常染色体優性または X 連鎖性遺伝と考えられ、発生頻度は出生 1 万～5 万人に 1 人。特徴的な顔面や成長障害、四肢や各臓器の奇形の他、知的能力障害や神経発達障害が高率に認められる。コピーン複合体やその制御因子の遺伝子変異が複数個報告され、転写の調節異常が引き起こされることが CdLS の病態だと考えられている。我々は CdLS に関連した自閉スペクトラム症の 2 症例を経験したので報告する。

【症例 1】33 歳、男性。3 歳時に当院小児科で CdLS と診断され、幼少期には言語運動発達の遅れ、物の位置やシーツの皺へのこだわりがあった。X-15 年 (18 歳) 作業所に通所後から情緒不安定が目立ち始め、頻回の 110 番 119 番通報が出現。X-9 年より当科外来に通院、薬物加療が開始されたが著変はなく、X-3 年より聴覚過敏や女性の胸に対する強い興味認められた。X 年 3 月抜歯治療後から易怒性悪化し、X 年 4 月当科に入院した。病棟では人の会話に急に割り込む、以前旅行した北海道の観光名所や食べた物などを繰り返し書きだすなど反復的な行動や、予定日時へのこだわり

が認められた。当院歯科で治療終了して以降、易怒性は自然軽減したが、急な予定変更に対しては一時的に興奮を呈した。X年6月当科退院した。

〔症例2〕28歳、女性。3か月健診後にT大学小児科でCdLSと診断された。幼少期から言語運動発達の遅れや多動傾向、つま先歩きがみられた。X-10年(18歳)から「す」の丸まった部分を黒く塗る行為を繰り返すなどのこだわりが出現。X-5年日中一時支援施設に入所した頃より手の皮を剥ぐ自傷行為や抜毛の習慣が持続するため、X年7月Aクリニックを紹介初診した。Aripiprazoleが処方開始され、X年9月同剤6mgまで漸増されたが自傷癖に著変はない。

【考察】我々はCdLSの患者で、自傷癖、興奮などが出現後、数年経過してから精神科を初診した2症例を経験した。認められている自傷癖、110番119番の通報癖は行為自体が習慣的儀式である、もしくは意思疎通の困難などによる欲求不満から生じている可能性が考えられた。双方とも、特別支援学校を卒業するまでは問題行為は目立っておらず、環境や周囲の対応の重要性が伺えた。双方の家族とも、こだわりや反復する行為が自閉症状という認識がなかったことが、迅速な精神科受診に至らなかった理由だと予測される。自閉症状を合併しようと報告されている遺伝疾患は数多く、それら疾患の一部にはガイドラインが公表されているが、自閉症状の評価の必要性については記載されていない。CdLSに限らず、遺伝疾患に関連した自閉スペクトラム症の存在について認知度は低く、今後、小児科医や精神科医が認識を深め、患者家族に認知を広めていく必要がある。

3 脳画像検査と臨床症状の間に乖離がみられた前頭側頭型認知症の症例

吉永 清宏・福井 直樹・渡邊 藍子
横山 裕一・北村 秀明・染矢 俊幸

新潟大学医学総合病院 精神科

行動障害型前頭側頭型認知症 (Behavior variant frontotemporal dementia; bvFTD) は、1892年に

Pick病として最初に報告され、現在は、病理組織学的多様性 (TDP-43, tau など) を有する Frontotemporal lobar degeneration; FTLD の subtype の 1 つに分類される。DSM-5 では、bvFTD の国際診断基準 (Rascovsky ら、2011) に準じて新たに「前頭側頭型認知症」として診断基準が設けられた (DSM-5, 2013)。今回、臨床症状は bvFTD の診断基準に合致するものの、典型的な脳画像所見を欠く 1 症例を経験したので報告する。また、FTD の臨床症状と脳画像検査について自験例 13 例についても後方視的に調査した。

症例は 62 歳、女性。60 歳ころから、パートの仕事が雑になり解雇された。「膀胱が変だ」と訴え、自宅では家事をしなくなり、1 日中チラシを眺めて過ごすようになった。また、毎日枕についた髪の毛を数える、「便が出ない」と繰り返し訴え、夫が注意すると包丁を持って怒り出すこともあった。食の好みが変わり、ゼリーを好んで食べるようになった。記憶力、立体認知機能は比較的保たれ、神経学的に特記事項も認めていなかった。脱抑制、アバシー、共感の欠如、常同行動、食行動の変化を認め、臨床的には bvFTD が疑われたが、頭部 MRI ではシルビウス裂周囲の萎縮、脳血流シンチではシルビウス裂周囲の血流低下のみで、臨床症状に比較し前頭葉の所見は乏しかった。本例を含め 2009 年 1 月から 2014 年 7 月の期間に当科へ入院し、FTD (疑い) と診断された 14 症例について後方視的に再調査を行った。14 例 (男 5/女 9 人、 65.4 ± 8.7 歳) において、画像上明らかな前頭側頭葉の所見を認めた症例は MRI 8/14 例 (57.1%)、脳血流シンチ 6/13 例 (46.2%) で、両者を合わせると前頭側頭葉に所見を認めるのは 9/14 例 (64.3%) であった。また、画像所見を認める群と、認めない群で、発症年齢、診断までの期間、認知機能検査において、統計学的有意差は認めなかった。既報において、臨床的に bvFTD と診断された 134 症例のうち、画像検査で前頭側頭葉萎縮を認めるのは 64% (Mendez ら、2007) と自験例とほぼ変わらない結果であった。また、アルツハイマー病と比較して FTD は脳萎縮率にばらつきがあり (Chan ら、2001)、健常例に近いものから萎縮が高